

厚生労働省：平成 18 年度 障害者保健福祉推進事業

障害者自立支援調査研究プロジェクト第 1 次

1. 事業実施報告書

事業区分：(1)

① 事業名

知的・精神・発達障害者の『専門的就労（*下記参照）』形態の開発・展開事業

ー「福祉」と「教育」の連携による新たな障害者就労と異分野からの福祉人材発掘を試行するための
訓練プログラムー

(*)『専門的就労』とは、一定の雇用関係によらず時間に束縛されなくて、特別な技能・技術・知識に基づき独立して営む職業と定義する。例えば画家・音楽家・舞踏家など。

② 事業実施目的

障害者の就労・就業において、企業や特例子会社・個人事業主と雇用契約を結ぶ「一般就労」や授産施設などの「福祉就労」ではなく、『専門的就労』として特に知的・精神・発達障害のある人が自立・独立することを目指す。

③ 国庫補助精算額

9,000,000 円

④ 事業実施期間

平成 18 年 7 月から平成 19 年 3 月 31 日まで

⑤ 事業実施場所

- ・社会福祉法人素王会アトリエインカーブ
- ・金沢美術工芸大学（金沢市立）
- ・金沢湯涌 創作の森（財団法人金沢芸術創造財団）

⑥ 事業内容

1 海外／NY フィリス・カインド・ギャラリー取材

期日：平成 18 年 8 月 22 日～8 月 29 日

インカーブのアーティストの作品を扱う NY フィリス・カインド・ギャラリーを取材。

2 国内／インカーブアーティスト寺尾勝広氏の非常勤講師（サポート 今中）（金沢：金沢美大 教室）

開催期日：平成 18 年 10 月 19 日（木） 15：50～17：15 講義内容：色彩論

対象者：2 年生 145 名 全学科共通 マスコミ：朝日新聞/朝日放送/毎日新聞/NHK 大阪/MRO 北陸放送/
北陸中日新聞

3 国内／オリエンテーション（金沢：金沢美大 教室）

開催期日：平成 18 年 10 月 19 日（木） 18：30～20：30

インカーブと金沢美大の連携活動に先立ち、美大にてプロジェクト・レンダのオリエンテーション
（概要説明）を行う。

講演者：今中博之（社会福祉法人素王会理事長/アトリエインカーブ施設長）

対象者：学生・保護者・施設スタッフ・市職員等（約100名を想定）

マスコミ：朝日新聞/朝日放送/毎日新聞/NHK大阪/MRO北陸放送/北陸中日新聞

4 国内/シンポジウム（金沢：金沢21世紀美術館シアター21）

金沢21世紀美術館シアター21にてシンポジウムを開催。

主催：アトリエインカーブ、金沢美術工芸大学

後援：金沢市/（財）金沢芸術創造財団（金沢21世紀美術館・金沢湯涌創作の森）

開催期日：11月10日（金） 18:00~20:00

講演者：今中博之、秋草孝教授（金沢美大）、奥平俊六教授（大阪大学大学院）、
服部正学芸員（兵庫県立美術館）

ライブアート：インカーブのアーティスト、寺尾勝広氏、湯元光男氏、新木友行氏

対象者：教育関係者・学生・美術館キュレーター・保護者・施設スタッフ・市職員など約165名

マスコミ：毎日新聞/全国社会福祉協議会出版部「月刊福祉」/北陸中日新聞 等

画集発行：タイトル「ATELIER INCURVE」（バイリンガル）

5 国内/アーティスト・イン・レジデンス（金沢：湯涌創作の森）

開催期日：平成18年11月11日（土）13:00~17:00

12日（日）10:00~12:00

インカーブのアーティスト寺尾勝広氏、新木友行氏、湯元光男氏が芸術家滞在制作事業（アーティスト・イン・レジデンス）として湯涌創作の森にて作品制作を行う。

インカーブのアーティスト、アトリエインカーブスタッフ、美大インターンシップ生、教員が参加。

6 国内/インターンシップ（大阪：インカーブ）

金沢美大の学生と教員をインカーブに招聘、研修滞在する。学生はインターンシップとして参加。

開催期日：平成18年11月25日（土）、26日（日）/平成19年随時

7 海外/NYアウトサイダーアートフェア2007 出品（米国：NYアウトサイダー・アート・フェア）

一昨年、昨年に引き続き、今年は7名のインカーブ内のアウトサイダーアーティストの作品をNYフィリス・カインド・ギャラリーから出品。

開催期日：平成19年1月26日~平成19年1月28日

⑦事業の効果及び活用方法

日本における知的・精神・発達障害がある人たちが『専門的就労』により独立するためのプロセスを確立すべくその展開を探り、「福祉」と「教育」の連携によって『異分野からの福祉人材の発掘』を試行する本試行訓練プログラムを、この度完遂した。

知的・精神・発達障害者のなかには芸術的才能など特出した能力が備わっている人がおり、その能力を最大限に生かす就労形態は『専門的就労』である。本人の能力・特性にあった自立支援を行うこと、つまり企業等への「一般就労」や授産施設等への「福祉就労」だけではなく、また単純作業に従事させるのではなく、才能を存分に引き出し、それを雇用関係や時間の束縛のない『専門的就労』として成立させる必要があるとして、本試行訓練プログラムに取り組んできた。ここでは、知的・精神・発達障害のある人の中でも特に「創造性」がある人に対し、芸術の分野で成業することを目指し、「福祉=社会福祉法人素王会アトリエインカーブ」と「教育=市立金沢美術工芸大学」が連携し、『専門的就労』としての可能性を大いに探ることができた。市立金沢美術工芸大学は、学内の技術工芸研究所・連携センターの連携プロジェクトとして学内全体にオーソライズし、推進してきた。正規の美術教育を受けていない者がつくりだす芸術作品は「アウトサイダーアート」と呼ばれ、結果として知的

障害者・精神障害者・霊媒師等がつくる作品を指す。欧米ではひとつの芸術分野として確立しているが、日本ではまだ「障害者がつくった」作品という前書きがついて語られることが多い。純粋に作品の評価を得ようとするとやはり本場はニューヨークやヨーロッパであろう。

本試行訓練プログラムは、アトリエインカーブの知的障害があるアーティスト寺尾勝広氏が市立金沢美術工芸大学の非常勤講師として就任したことから始まった。国公立・私立を問わず、知的障害のある人が大学の教壇に立つことはおそらく日本初の出来事である。寺尾氏がただひたすら自らが好む題材である鉄骨図面作品を制作する姿は、将来ある美術大学生の心を大きく揺さぶった。

さらに金沢 21 世紀美術館でシンポジウムを開催し、福祉関係者のみならず教育関係者、アート・デザイン関係者など多くの分野から定員を大幅に越す来場者があった。パネリストには市立金沢美術工芸大学視覚デザイン専攻秋草孝教授に加え、アウトサイダーアートの歴史的研究を行い、大阪府養護教育研究所など全国役 50 カ所での講演実績のある大阪大学大学院東洋美術史専攻 奥平俊六教授と、日本で唯一アウトサイダーアートを論じる公立美術館学芸員である、兵庫県立美術館 服部正氏が参加し、アート・福祉・教育・労働など多角的観点からの、熱気溢れるシンポジウムとなった。あわせてアーティスト・イン・レジデンス（障害のある芸術家滞在制作事業）（*2）として、金沢市の研修施設「創作の森」にアトリエインカーブの知的障害のあるアーティスト寺尾勝広氏・新木友行氏・湯元光男氏を派遣。作品制作を行い、来場者の方にその姿を見ていただいた。熱心にそして生き生きと制作する彼らに、来場者の方はそれぞれに響くところがあったようである。またアーティストたちはアーティスト・イン・レジデンスの対価として報酬を得た。また、作品そのものを発表すると同時に画集という形でも発信し、より多くの人に彼らの作品性を訴求した。これらの試行訓練プログラムは『専門的就労』を活かして生計を立てるということをプロトタイプの一つとして証明することができた。アーティストたちの創造性が認知され、それにより収入を得ることができたということは『専門的就労』の確立に直結し、すなわち彼らの独立への第一歩となるだろう。画集とあわせて事業報告書として本試行訓練プログラムの効果をまとめ、特別な技能を有する知的・精神・発達障害がある人たちが、『専門的就労』によって自らの才能で独立する機会を引き続き探り、今後の「福祉」「教育」への活用をはかるものとする。

「福祉」と「教育」の連携は、社会福祉法第 89 条にある人材確保指針の見直し・改正にも一石を投じるものであり、これまで交わることがなかった福祉分野と教育分野で人材が還流することで、社会福祉従事者の量的拡大だけでなく能力の活性化を図ることができる。さらに本試行訓練プログラムの結果を踏まえ、今後、絵画・彫刻分野以外（例えば音楽・舞台など）でも展開できることを考察することとする。

彼らの芸術的才能を引き出し伸ばすためには、専門分野の知識・技術が必要である。しかし、現状の福祉施設では、スタッフ・職員は福祉系学校を卒業した者がそのまま授産施設等に勤めるケースが大半である。これでは職業としての専門性を持ち合わせていない者が知的・精神・発達障害のある人に対し「指導」として単純作業に従事させることになり、その生産品は福祉的観点の展開・販売領域をでない（例えば終日段ボール箱を組み立てたり、バザーでクッキーを売ったり）。まずはスタッフ自身がその職業者としてのプロフェッショナルでなければならない。アトリエインカーブでは、スタッフは全員、芸術・デザインの実務経験者であるとともに社会福祉従事者としての素質を兼ね備えた人材である。スタッフは、所属アーティスト（知的・精神・発達障害のある人）の芸術的才能を見出し、その作品をニューヨークで展開・販売している。この場合、彼らの作品は非常に芸術性が高いという認識をもち、その芸術性が正当に評価される展開先や人的ネットワークを構築するのはスタッフの専門性によるところが大きい。今後のスタッフ育成課程として、アトリエインカーブと金沢美術工芸大学が連携し、大学教授陣 2 名と生徒 3 名がインカーブに研修に訪れ、アウトサイダーアートに関する基礎知識を習得、インカーブで知的・精神・発達障害のある人たちと実際に接し、現場スタッフから支援の仕方を学んだ。生徒はこれをインターンシップ制度として活用した。特に生徒ははじめのうちはどのように接したらよいのかという戸惑いを抱えながらの参加であったが、アーティストたちと過ごすうちにそれは杞憂であるということを感じたようであった。障害のある人たちが置かれている社会保障の状況などにも関心を向け、それに対して、アートや

デザインので何ができるだろうと考え込む姿は、次代を担う福祉分野スタッフの在り方ではないだろうか。従来の福祉の枠組みの中で人材が循環されるのではなく、授産仕事内容にあった専門性をもちあわせているスタッフが入ることで障害者の就労支援事業の底上げに繋がるという確信を強める結果となった。この底上げはアーティストの育成・養成に直結し、ひいては就労を支援される側から自らの力で自立する側へ、本人が『専門的就労』として独立することが可能であるということを裏付けている。インターンシップ制度は単年度事業として終わらせるのではなく、引き続き継続するものとして計画している。

*1

金沢美術工芸大学では平成 10 年からアート・イン・レジデンスを始め、平成 13 年からは金沢 21 世紀美術館との共同事業として国際芸術家を招聘している。平成 15 年には文部科学省に「特色ある文学支援プログラム」として採択されている。